

旧城跡三十二番地

眞尾 悦子

未 來 社

旧城跡三十二番地

眞尾 悦子

未 來 社

旧城跡三十二番地

一九六二年五月三十一日 第一刷発行

定価 二八〇円

著者 真 尾 悦 子

発行者 西 谷 能 雄
東京・文京・表町

発行所 株式会社 未 来 社

東京都文京区表町三番地
電話(八二)六九六(八三)〇四番
振替東京八七三八五番

検印廃止

乱丁・落丁本はおとりかえします。
(ふじ活版・萩原印刷・佐山製本)

旧城跡三十二番地

目次

旧城跡三十二番地 7

名 前 36

酔ってみたい 43

犬ころのこと 52

妖 怪 59

息子の一日 70

貨幣価値 77

絹さん 84

分娩料 91

私立探偵 98

カチカチ山 104

どろぼう 110

野外炊飯 117

関白 126

癌と親類になつたはなし 129

アミダ経 141

しあわせについて 153

金看板 165

あとがき 195

旧城跡三十二番地

旧城跡三十二番地

私たちがこの町へやってきたのは、ついこのあいだのような気がするけれども、もうかれこれ十年あまり経ってしまった。

あのときはじめて住んだ家には、水道も井戸もなかった。私の家といっても、それは小屋に近いうなひといあばらやである。頭のつかえそうな煤けた裏口を出て、腐れかかった板っぎれの橋をまたいだところに、かなり大きな水槽があった。すぐうしろの小高い繁みから竹のかけいがのびて、水槽の中へ水を落し続けているのだった。澄んだ、うまい水である。水槽の真上には、ひとかかえもあるような桜の老樹が枝を垂れていて、ちょうど花が盛りであった。その家に住むようになって十日も過ぎたころ、私は早産をしてしまった。七ヵ月目だった。

赤ン坊は普通児の半分ぐらいしかなかった。私は産後四、五日で起きて、板に小布こふをはりつけ

たり、それらを縫い合わせたりした。赤ン坊に着せるものの用意がまるで出来ていなかったのである。二歳になった長女は、私のそばで糸巻きをころがしたりしてひっそりと遊んでいた。

私の家の北側は、遙か向こうまで大きな沼になっていて、黒々と不気味に淀んでいた。隣家というのは、沼に面して畑一枚へだてたところにポツンと一軒。あとは、沼をとりまいて五、六軒見えるだけだった。低い山や、くずれ残ったものらしい大きな石垣などに囲まれたこのあたりは、人通りも極く稀である。それは、旧城跡という地名がびったりする風景であった。

夫は、いい按配に、まもなく新聞広告で職を見つけた。東京を出てから半年あまりいた前住地では、夫はずっと病気で寝どおしであった。全く、久しぶりの勤めである。

この、小さな城下町に、顔見知りの人一人いるわけではなかった。まるで、風に吹かれて流れていた綿毛にも似た私たちである。私は、毎日うす暗い家の中でヤモリのように暮らした。魚類は夫が会社の前の店で求めてきたし、野菜は、リヤカーをひいて売りにくる老婆から買えば事がたりるのだった。

つぎはぎする布も尽きて退屈した私は、一度ぶらりと散歩に出かけたことがあった。私の家の前の道を一〇〇メートルほど南へ歩くと、この町をひと目で見おろせる、物見が岡という高台に出る。昔やぐらがあったらしい跡には、小さなお稲荷様いなりさまの祠ほくらがあるだけで、あたりは草茫

茫に荒れたままである。武士たちが駿馬^{しゅんま}で駆けぬけたであろう石ころ道を、黒い人影がゆっくりのぼってきて、やがて見えなくなった。

しかし、私はそこへ出かけることは一度だけでやめてしまった。すぐ眼の下に、駅の構内が見えたからである。レールが幾すじも光って南北に流れていた。ホームの旅客たちは、木製の階段のほうへ消えていくのもあり、列車の到着を待つ風情^{ふうせい}もある。そして列車は事もなげに都へ向かって走り去っていく。それは、私には酷な風景であった。

あの線路の果てに都会の渦の哀歎がある。私の幼い日の、まだ戦争の傷み^{いたみ}を知らなかった東京の町の姿と重なって、私の心の中で美化されているのである。私はいま、そういうものを早く振るい落して、忘れ去らなければならない。

もと、この家のうしろの山添いに、貸しボート屋があったそうである。しかし、今は傾いた細い柱が二、三本残っているにすぎなかった。そのじぶんには、いまの私の家にボートの番人が寝起きしていたのかもしれない。戦争のためにボートに乗る若者がみんないなくなつて、さびれてしまったのだろうか。

あおく苔の生えた石の水槽には、いつも水が溢れていた。桜の花びらが、点々と浮かんでい

る。水といっしょに、ひとひら、ふたひら、こぼれ出ていくのもあった。

隣家の主婦も、朝晩バケツをさげてそこへあらわれた。着物の前がよく合わさらないほどふとっているが、割烹前掛がうまくそれを隠していた。気さくそうなおばさんである。

私たちは「おはようございます」「こんばんは」「ぐらいいいか言葉を交わさなかった。お互いに何も知らなすぎて、話題が見つからないのだ。私が「こんばんは」と言うと、彼女は「お晩かたですウ」と尾をひいて挨拶を返した。まだ夜になりきってはいない。ほの明るいのである。なんとというひなびた響きをもった、いい言葉であろう。昏れきってしまうと「お晩です」と言う。そのことだけで、私はこの全く未知の北ぐにの町が、好きになれそうだと思った。

桜の季節が過ぎると、静かな裏山にいちめに椿の花が咲いた。私が産んだ月たらずの赤ン坊は、ついにいのちが絶えた。棺の中を紅、白とりどりの椿の花でいっぱいにして、夫が火葬場まで手で提げて行った。

六月の末日。夫は夜になって一度顔を見せたが、またすぐに出ていってしまった。この町の警察署が占拠されたという事件がおきたのだそうである。別に銃声が聞こえたわけでもない。私には、ただ静かな雨の日であったのだが――。私は、土地にも馴れない、新米の新聞記者である夫が、怪我をしやすいかと本気で心配した。しかし、事件はあっけなく片付いた。人

民政府！ と叫んだ人々は捕えられて、町はすぐ平静にかえたのである。

それと前後して、町はずれに一家四人殺しという血なまぐさい出来事があった。小さな手足、を宙に泳がせて、幼児も殺されていたそうである。検屍の模様を取材した夫は、夜更けに蒼白な顔をして帰ってきた。長女と私が沼のそばの家で夜を過ごしているのが、ひどく不安だったという。なんとなく、まだ世の中も落ちついてはいなかった。

このあたりには、どういふものか野良猫が多いようだった。町の人々が猫の仔を捨てにくるのに恰好の場所だったからかもしれない。夜になると、私たちはその猫の啼き声を、死んだ赤ン坊の声とまちがえて、思わず窓のほうへ走り寄ったりした。

ある雨の晩、猫ではなくて、まさしく人間の声が聞こえてきた。窓の下あたりである。話し声は、雨の音に消されそうになったり、またボンボンと続いたりした。夫はじっと私の顔を見た。怪しい。彼は懷中電燈を持って、キッと身構えた。私たちが窓へ近づくと、話し声は絶えた。ガタピシ、夫がガラス戸を開いて懷中電燈を突き出した。細く丸い光りの先に、一本の傘の中でもつれながら遠ざかっていく人影が照らし出された。

荒れ果てた沼には、ボートはおるか、釣りびともめったにやって来なかった。花が過ぎ、沼

面に映る木々の葉の色が濃くなって、やがて夏がきた。

私は、暗い台所での炊事にもだいぶ馴れた。汲み水をじょうずに順序よく使って、最後に雑巾をしぼるまで滅多に捨てない要領も覚えた。

「水をいっぱい、くれとくなんしょ」

新吉がきたらしい。私は洗いの手を休めないでそれをきいていた。私も隣家の主婦も、朝と夕方、バケツに汲み込めたりるのである。こんな昼日なかに水を汲みにくるのは、彼以外にはしない。誰といって水槽の持ち主があるわけでもないのに、彼はそこに人がいてもいなくても、かならず声をかけてから水を汲むのである。

鍋を洗いあげて、私がひょいと裏木戸から顔を出すと、新吉は思いがけなく沼で水浴をしていた。じっとしていても汗が流れるような午後であった。彼はのどをうるおしたただけではものたりなくなったのであろう。くびまですっぽり水に浸って、頭の上に布きれをのせている。それは、常にかろうじて彼の上半身を包んでいる、シャツの破片のようなものである。色は、赤、青さまでであった。新吉はのっそりと岸に這い上がって、山のほうを向いてしゃがみ込んだ。頭にのせていた布を手拭いがわりにして、体の垢落しをはじめたのである。始終油断な

くあたりに気を配っている様子だった。静かな上天気の沼の周辺には、犬の影も見えはしなかった。しかし、いつ誰があらわれるか、それはわからない。彼は全くの裸身をさらけ出しているのである。彼としても、この思いつきは初めてのことなのであろう。背中が羞恥にふるえていた。ボロを水に浸してはゴシゴシこする。こするあとから若い皮膚がむき出しになって、真夏の太陽に輝いた。

新吉は、もう一度沼に入るつもりか、ボロを前に当ててこちらを向いた。均整のとれた、美しい裸像である。私は、とっさに自分の体を板戸の中へひっこめた。

「新吉」という名は、隣家の主婦が私に教えたのである。彼は、いつも茶褐色の雑のうを肩からさげていた。そして、どんなに暑い日でも足首までかくれるズボンを離さない。それらは意外にも私のすぐ近くにひとまとめに置いて置いてあった。彼は何を考えたものか、私の家の裏口を脱衣場に使っていたのである。ズボンの上の雑のうは、どうやらひどくふくらんでゴツゴツしていた。芋の屑でももらってきたものか、あるいは、思いがけなく現金のもらいがあった、店頭で買ってきたのかもしれない。水浴でくつろいでいる彼は、ともかく今日のところは富豪だったのである。この男は、もしかすると、ひとかどの家に生まれたのではないかと思う。白日の下でこうして眺めてみると、恰好のいい鼻を中心に、どこことなく品格のある顔をしていた。

彼は、あの、駅に近い高台に住んでいた。そこには、横穴式の防空壕が幾つも隣り合っているのだった。私は以前に、偶然ちょうどいいところに通り合わせて、彼の住居の内部をとくと拝見したことがある。

その日、もうじき日がくるといふ時刻になって、娘が汽車ポッポを見たいとむずかった。私には駅は禁物なのだが、仕方がない。娘の手をひいて家を出た。防空壕の前まできたとき、新吉が中をまる見えにして掃除していたのである。戦争ちゅうに、空襲に備えて掘られたものである。同じようなほら穴の中に、いまはそれぞれ人が住んでいるのだった。新吉の住居は、北のはしの穴で、この前に見たときは入り口に古むしろを垂らしてあった。ところが、その日は扉がわりのむしろまでも取り払っていたのだから、大掃除の部類だったのかもしれない。床にも黒ずんだむしろをペロンと一枚敷いてあった、と、みるまにそれも剥ぎ取って戸外へ投げ出した。奥の土の壁には棒きれが二本、眼の高さに小鳥の止り木のように渡してあった。ものを乾したり、ちよいとひっかけておくのに非常に便利だ。煤でまっ黒のヤカンと、小さな鉄鍋が右手の隅に並べてある。これで、彼は案外きれいい好きとみえる。床や壁の土がコンコンに固められて、黒光りしていた。

新吉の簡易生活にくらべると、隣りもそのまた隣りも、かなりの子沢山だった。ガラクタが